

(第45回) 音楽鑑賞会

紀尾井ホール室内管弦楽団第130回定期演奏会

2022年度紀尾井ホール室内管弦楽団(KCO)開幕公演が4月22/23日両日に開催されアイアン・クラブ関係の方々14名の一人として出席した。KCOは昨年来コロナ禍の影響を受け演奏会の日程や演奏者の変更など当初の企画・予定を何度か修正することを余儀なくされ、その対応に腐心したものと推測された。

今回の定期演奏会も奇しくも然りであった。今年度から”KCO 新時代—新首席指揮者トレヴァー・ピノック (Trevor Pinnock) (74歳)とともに歩む新たな旅の幕開け”と銘打ち昨年度までKCOの第2代首席指揮者を務めたライナー・ホーネック (Rainer Honeck) の後を受けた就任公演であったのが、急病のため出演が見送りとなったのである。このことにより当初謳われた”オール・モーツァルト・シンフォニーズ”の演目が組み替えられ、演奏会のキャッチフレーズも”ピノックが後継者の一人と認めるジョナサン・コーエン (Jonathan Cohen) (44歳)と、ミュンヘン・フィルの若きリーダー青木尚佳 (なおか) (29歳)、KCOの同時デビュー”と改められた。演目は当初予定のモーツァルトの交響曲3曲の中からピノックが10年前にKCOと共演した交響曲第39番を残し、他に大きい演目としてベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を加えたものであった。新首席指揮者デビューの期待がお預けとなり、次善の策とも思われる今回の公演に多少の訝しさを感じつつ開演を迎えた。尚、観客は今年に入り去年より増えており、800席のホールには600席を超える席が埋まっているように見受けられた。

指揮を執るJ.コーエンはT.ピノック同様英国出身で共に初期古典音楽が得意とされている。また、パンフレットにはチェリストとしてフィルハーモニア管弦楽団など主要オーケストラの客員首席チェリストとして演奏し、その後活躍の場を広げ指揮、鍵盤演奏のキャリアを築いたと紹介されている。因みに、R.ホーネックはヴァイオリン、T.ピノックもチェン

バロ、オルガン、ピアノの鍵盤奏者として活躍し、指揮者としても活発な演奏活動を行っている。このことで余談だが、米国MLB大谷翔平の”二刀流”ではないが近年の演奏家も指揮者としてまた楽器演奏家としてマルチの活躍が見受けられるようになったとの印象を持った次第である。



一方、今回の演目変更でヴァイオリン・ソリストとして登場した青木尚佳は、2009年に日本音楽コンクールで2位を受賞後、桐朋学園を終了し英国王室音楽大学に留学。2014年にはパリでのロン＝ティボー＝クレスパン国際コンクールで2位の受賞を初め英国でもコンクールの優勝を重ねた。その後日本を含め数々のリサイタルや著名オーケストラとの共演を行い、本年3月にミュンヘン・フィルのコンサートマスターに就任した。これからの活躍も大いに期待される日本の新星バイオリニストで、本日のKCOとの共演が楽しみであった。

今回のプログラムは前半2曲、後半1曲の3曲であった。後半の1曲は以前いにしへの巨匠アルトゥーロ・トスカニーニの演奏をレコードで聴いたことがあり、その演奏時間は20分程度であった記憶で、一方今回の演奏は手にしたプログラムでは約30分とあり、同じ曲に対して指揮者によりかくも違うものかと思いつつ開演に臨んだ。

**(1) モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart
(1756-1791) :**

歌劇《ドン・ジョヴァンニ》 K.527～序曲

モーツァルト 35歳の生涯で、この曲は没年より4年余り前の1786年に書かれ、「フィガロの結婚」(1778年)と並ぶ代表作の歌劇といわれる。歌劇では物語の内容を暗示させる序曲の演奏が終わって幕が開くが、この序曲は明確な終結部がなくそのまま歌劇の導入曲につながるの、モーツァルトは別途演奏会用に華々しい終結部を作曲したと解説書で知った。

曲は歌劇のオチ(放蕩を尽くしたドン・ジョヴァンニが地獄に落される)から始まるので、いきなりドンと地獄に落ちるさまが迫力ある演奏で表される。それが極めて艶を感じさせる音色で、メリハリの利いた演奏が続く。コーエンはカジュアルないでたちで指揮棒は持たず、KCOと同じ目線に立って音を引き出していくようであった。その一体感は”旧知の仲”といった感じで、臨時の客員とは思えない指揮振りであった。見事な演奏はKCOの実力でもあるが、久しぶりに接したナマのオーケストラの音はやはり感動するものであった。

**(2) ベートーヴェン Ludwig van Beethoven
(1770-1827) :**

ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op.61

この曲は1805年から略10年に亘るベートーヴェン中期の最も充実した創作期の交響曲第4番に続く1806年の作品だが、その半世紀前後あとに作曲されたメンデルスゾーンとブラームスの作品と共に「世界三大ヴァイオリン協奏曲」と謳われるも初演以来ベートーヴェンの生前を通して不評であったそうで、それが不思議に思われる。

演奏はティンパニの静かな打音から始まり KCOによりテーマを絡めた演奏が暫く続き、やがて青木尚佳の細やかで澄んだヴァイオリンの音色が登場する。曲はその後口ずさめるような旋律で終始する中、音量の増減が波のように繰り返されダイナミックな展開が続く。ベートーヴェンはピアノを弾いてもヴァイオリンは得手ではなかったためか、ソリ

ストの腕の見せ所であるガデンツァをこの曲を贈り初演のソリストでもあったクレメントに任せて、敢えて作曲をしなかったとする逸話を目にした。そのガデンツァも青木尚佳は落ち着いた様子で力強く聴きごたえのある演奏で楽しませてくれた。また、コーエンの指揮する姿は若々しくいかにも恰好が良い。そして、青木尚佳との息がピッタリ合っているようで、KCOと青木、即ちオーケストラとヴァイオリンのソロとの競演を見事に創り出した。この演奏を聴いてこの曲が出来た19世紀初頭に不評だった不思議が解けた思いがした。それは筆者の勝手な推論だが、その当時の音楽は教会か宮廷文化に馴染む音階、和音、形式とするとの常識で、それを覆すような作曲家の自己表現をこの協奏曲が体現したからではなかろうか。例えば、古来協奏曲の主役はソリストでありオーケストラは脇役とする常識があったが、この曲が両者対等にしたこともその常識を逸脱する斬新なもので不評の一因となったのではなかろうか。これはさしずめ改革派の台頭を守旧派が認めず、しかしメンデルスゾーンやブラームスの時代にはベートーヴェンの改革が手本となったということではなかろうか。この演奏によってそのような思いも巡らすものとなった。

演奏が終わり冷めやらぬ熱気で鳴りやまない拍手の中、協奏曲を弾いたソリストとしては珍しく青木尚佳はアンコールに応えた。曲は一転雰囲気を変え、古典的な和音と旋律で、恰も協奏曲で高揚した気持ちを鎮めるような穏やかなものであった。(J.S.バッハ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第3番第3楽章ラルゴ)

**(3) モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart
(1756-1791) :**

交響曲第39番変ホ長調 K.543

この曲はモーツァルトが生涯を閉じる3年前1788年(32歳)に作曲され、交響曲第40番と同41番(ジュピター)と合せて「後期三大交響曲」と称される最初の曲である。奇しくも、この「三大交響曲」は1ヵ月半で次々と作曲された由。それこそ天才ならではの創作なのであろうと思える。ただ、この時期はモーツァルトの気放な生活からか頻繁に借金を重

ね心身ともに苦悩する日々でもあったと言われている。

演奏は第一楽章のアダージョ、ゆっくり荘厳な雰囲気から始まる。そしてアレグロに移りモーツァルトらしい軽快な曲調が展開され、進むにつれて盛り上がりが増し、KCOのフル稼働で楽章が終わる。通常第一楽章から一転して緩やかなテンポとなる第二楽章は筆者にはやや地味な印象が強いが、反面各楽器パートの演奏が際立ち音の芸術をじっくり味わう静かな醍醐味を感じる楽章とも言えるのではないかと思う。この曲でもアンダンテのゆっくりとしたテンポが基調であるが、明確なメロディーが常に流れて、その流れが盛り上がり下がり、早くなったりスローダウンしたりと飽きることなく繰り返される。それこそがモーツァルト・サウンドかと改めて思ったものであった。そして、第三楽章特有のアップテンポはメヌエットらしくモーツァルトが慣れ親しんだと思われる宮廷の艶やかさを想起させるもので、うきうきした気分であった。アレグロの第四楽章も第三楽章同様早いテンポで終始する。まずヴァイオリンが強い音調でテーマを奏で華やかな雰囲気が出される。そこに木管が同じ音型を繰り返して更に雰囲気を盛り上げて早いテンポのまま終わる。

演奏時間は”約30分”とプログラムにあったが、時

計を見たらその通り29分20秒であった。KCOの演奏ぶりを見ると、特にこの曲の後半はフル回転の連続であったが、かのA.トスカニーニが1948年にタクトを振ったこの曲の演奏時間が20分余りで、共演したNBC交響楽団は如何に忙しく楽器を鳴らしたことか。強面で知られるトスカニーニに引きずられて楽団員が汗をかきながら超人的な離れ業で演奏する姿が想像され思わずほくそ笑んでしまった。

演奏が終わると観客は指揮者として日本初デビューを見事に果たしたJ.コーエンを讃え拍手喝采が続いた。そして、筆者にはオーケストラ演奏で初体験であったが、アンコールが演奏された。曲は後刻知ったが、モーツァルトの英雄劇「エジプトの王タモス」第2幕への幕間音楽第3曲とのことで、これも筆者には初体験の視聴であった。

今回の演奏会はピノックに替わる新鋭の指揮者、曲目の大幅な変更と些か不安を感じたものであったが、それは全くの杞憂であった。コーエンのKCOと一体となった指揮での演奏や将来の更なる活躍が楽しみなヴァイオリンニストの青木尚佳を知ることになり、大満足な鑑賞となった。いかなる場合にあっても質の高い演奏を実現する紀尾井ホールに力に拍手を贈りたい思いでもあった。コーエンを後継者の一人と認めるピノックの病気からの復帰公演が増々楽しみとなった。(福田 修一・記)

